

論文

演劇による文化の教育資源化

日丸 美彦[†]

要旨

1995年にユネスコ世界文化遺産に登録されたコーディリエラ棚田群は、ルソン島北部山岳地域のイフガオ州に広がり、2000年以上前からイフガオ民族の伝統的農耕儀礼社会が形成されてきたと言われる。しかし。近年のグローバル経済の急速な浸透により若者の海外への出稼ぎや都市部への流出などにより、伝統的農耕儀礼社会は変容を余儀なくされている。世界文化遺産の棚田を営むための伝統的知識の継承と後継者問題が大きな課題とされている。

2018年4月～9月の期間、NGO「コーディリエラ・グリーン・ネットワーク（CGN）」が、フィリピン教育省イフガオ州事務所と連携し、イフガオの高校教師、生徒らを対象に自分たちの地域の農業をテーマとした聞き書き演劇ワークショップを実施した。本稿では、こうした取り組みを文化の資源化論をもとに演劇による文化の教育資源化として捉え、身体知による伝統知の継承が世界文化遺産である棚田の持続可能性に寄与する資源化となりうるのか、現地調査をもとにその過程と可能性を考察する。

キーワード

聞き書き演劇、教育資源化、伝統知、身体知、持続可能性

[†]愛知県立大学後期博士課程単位取得退学

I はじめに

本稿では、ルソン島北部山岳地域イフガオ州の高校教師を対象とした聞き書き演劇ワークショップの取り組みを、演劇による文化の教育資源化¹として捉え、身体知による伝統知の継承が世界文化遺産である棚田の持続可能性に寄与する資源化となりうるのかを提示する。

コーディリエラ棚田群は、近年のグローバル経済の急速な浸透により若者の海外への出稼ぎや都市部への流出などにより後継者不足と耕作放棄地の増加で、伝統的農耕儀礼社会も変容を余儀なくされている。2001年ユネスコの危機遺産にも登録された。その後、NGO、行政、教育機関による伝統的知識や技術の伝承を目的とした教育施策などが評価され、2012年危機遺産リストから除外された。但し、世界文化遺産の棚田を営むための伝統的知識の継承と後継者問題はなおも大きな課題とされている。

イフガオ州の高校教師を対象とした聞き書き演劇ワークショップは、「演劇ワークショップでアジアの農村をつなぐ—青少年を対象とする環境問題をテーマとした演劇交流事業」²の一環として行われた。本事業は、2018年度から2年間のプロジェクトとして、東ティモール、フィリピン、日本における世界農業遺産³の地域または申請地域で高校生を対象とした演劇の実践と交流が計画されている。ここでの聞き書き演劇とは、聞き書き⁴を用いて地域の農業に関係する人たちの話を聞き、その言葉をもとに演劇創作を行う。創作した作品の発表を通じて、各地域の高校生たちの相互間で伝統的農業の抱える課題を共有し、高校生たちの新しい気づきの場になることを目的とした教育演劇である。

フィリピンでのプロジェクトは、環境NGO「コーディリエラ・グリーン・ネットワーク（CGN）」⁵が教育省イフガオ州事務所の協力を得て、事業実施団体として運営に携わっ

1 本稿での教育の定義は、次世代を担う人を育てることであり、教育の場は学校に限らず地域社会、家族社会と多様であるとする。

2 総合地球環境学研究所が主催し、国際交流基金、トヨタ財団が助成している。

3 食料の安定確保を目指す国連食料農業機関FAOが、衰退しつつある伝統的な農業、文化風習、生物多様性などの保全を目的に2002年に開始した認定制度。

4 ここでの聞き書きは、NPO「共存の森ネットワーク」が主催する「聞き書き甲子園」(2002年から毎年開催)で用いられている手法を採用している。毎年100人の高校生が、森や海・川の名人100人を訪ね、その知恵や技術、ものの考え方や人となりなどを「聞き書き」し記録する活動で、名人の語り口調を一言一句書き起こし、その語り口だけを用いて作品をまとめる手法である(渋沢2005:314-323)。

5 反町眞理子が2001年9月に設立し、ルソン島北部コーディリエラ山岳地域を中心に、植林活動、環境教育、コーヒーの有機栽培の商品化などに取り組んでいる。2007年から環境教育の一環として、コーディリエラ山岳先住民の高校生を対象に、地域の民話をベースに身近な環境問題を取り上げる教育演劇ワークショップ「環境演劇キャラバン」を継続的に開催してきた。環境演劇キャラバンを契機に結成した「アナ

た。

筆者は、2018年4月30日～5月4日の5日間、イフガオ州フンドゥアン郡ハパオ村で、イフガオ州の高校教師18名を対象に実施された聞き書き演劇ワークショップと、2018年9月13日～14日に開催された上田街中演劇祭での演劇ワークショップと公演に同行し、参加高校教師、演劇ファシリテーター、教育関係者の取り組みを調査した。

本稿においては、文化の資源化論をもとに演劇による文化の教育資源化プロセスを考察する。文化の資源論において内堀は資源を、人間の活動の中で動的であるとともに、人間の生活に動的な力を供給するものと定義した（内堀 2007：19）。山下は、国家、グローバル、ローカルな公共領域の境界上で資源化が行われ、その資源化プロセスこそ考察すべき対象であると主張する（山下 2007：17）。森山は文化を資源化したのは誰かという、主体の問題とし、誰が、誰の文化を、誰の文化として、誰を目掛けて資源化するのかという、「誰」をめぐる四重の問いの機制なのであると整理した（森山 2007：86）。清水は、森山の「誰」をめぐる四重の問いの機制に加えて、「何のために / 誰のために」という

化プロセスを提示し、地域の持続可能性を導きうる文化の資源化とは何かを考察する。

II イフガオの伝統文化の変容と伝統文化教育

1. 山岳農耕文化のイフガオ州とハパオ村

イフガオ州（図1）は、ラガウェを首都としマニラの北、約380kmに位置し、標高1,500m前後の山々が連なるルソン島北部コーディリエラ山岳地方の一部をなす。その地形の急峻さとアクセスの悪さによって、スペイン植民地時代の影響も限定的となり独自の文化が形成された。イフガオ文化の特徴として棚田水田稲作、動物供犠、洗骨儀礼、頭蓋崇拜、首狩り、長子優先相続などを挙げている（合田 1997：28）。イフガオ州は11の自治体で形成され、コーディリエラ棚田群として世界遺産としてリスト化された棚田のある自治体はマユヤオ、バナウエ、キアンガン、フンドゥアンの4地域である。

イフガオ州の高校教師を対象とした聞き書き演劇ワークショップは、フンドゥアンのハパオ村（図2）で開催された。フンドゥアン役場の調べによると、ハパオ村の世帯数（2011



図1 フィリピン共和国イフガオ州
*白地図をもとに筆者作成



図2 イフガオ州フンドゥアン郡
フンドゥアン郡行政地図をもとに筆者作成

資源化の目的を問うことの重要性を強調した（清水 2013：173）。こうした先行研究をもとに聞き書き教育演劇の資源

化は324世帯、人口（2010年）は2,138人である。ハパオ村をはじめフンドゥアンの人々は、イフガオ民族トゥ

ク・ディ・カブリガン」は、2011年5月来日し、山梨県北杜市、愛知県名古屋（主催：愛知県立大学など）で公演を行った（日丸 2013：46-58）。

ワリ語族に属する。ハパオ村周辺には世界遺産に登録された大棚田群(図3、図4)が広がり、隣接するバナウェは世界文化遺産の観光都市である。なお、ハパオ村の周辺一帯は、アジア太平洋戦争末期に比軍方面軍総司令官山下奉文将軍の率いる日本陸軍主力部隊約6万人が最後まで立てこもった地域でもある。ハパオ村での米づくりの品種は、伝統米であるティノオン、赤米であるミナアガン、米酒のバヤや餅にするディヤコットなどである。農家では、鶏や豚を家で飼育する。カラバオと呼ばれる水牛を耕作に使うこともあるが、ハパオ村では1頭しか筆者は確認していない。またハパオ村は、観光土産や輸出用に木彫りの像や置物を製作する中心地でもあり、重要な現金収入源となっている。農作業の合間に副業として木彫りをする者も含めれば、100世帯以上で男たちは木彫り仕事をしている(清水2013:200)。ハパオ村の海外就労者について清水は、バギオ、マニラの都市部への出稼ぎに加え、1980年代から台湾、香港、シンガポールなどのアジアと、サウジアラビアなどの中近東への出稼ぎが急増し始めたと指摘している(清水2013:296)。海外への出稼ぎについては、2006年フンドゥアン郡役場統計によると、住み込みお手伝いとして働く女性を中心に、計150名以上の村人が、あわせて27ヶ国に海外就労している。海外で得られる現金収入と情報が村人の生活を支え、また変えている(清水2013:5)。ハパオ村から都市部、海外への就労者の増加や現金収入の増加によって、地域共同体の構成員の流動化と後継者不足を引き起こしている。

2. イフガオ州の伝統文化教育

後継者不足と耕作放棄地の増加などで、コーディリエラ棚田群は、2001年ユネスコの危機遺産に登録された。イフガオ州政府は、危機遺産のリスト化に直面し、イフガオ棚田マスタープラン(2003年~2012年)を策定し、先住民族の伝統的な知識を学校教育カリキュラムの中に統合する方針を立てた。その方針に基づいて、「先住民の伝統的な知識を若いイフガオの人びとの間に教育を通して培うプロジェクト(NIKE)⁶が2003年から実施された。このプロジェクトでは、「先住民族の伝統的な知識」を「民の知識」と称して、棚田で稲作の仕方、石垣づくり、鍛冶、木彫り、機織り、石工、農耕儀礼のシャーマンなど専門的な知識の保有者がどこに、どれだけいるのかを調査しリスト化することに取り組んだ(関口2012:82-107)。民の知識の保有者を集め、民の知識プロフェッサーと呼び、イフガオ国立大学を拠点として学生に講義してもらうための「民の知識パイロットスクー

ル」プログラムが2007年に始まった。2009年からは小学校の教員でも理科の授業で、民の知識を指導できるように教科書づくりもなされた(関口2012:108-141)。こうした伝統的知識や技術の伝承を目的とした教育施策などの効果が評価され、危機遺産リストから2012年に除外された。フィリピン教育省は、先住民族の伝統文化を公立学校の教育現



図3 棚田が広がるハパオ村 2018年5月筆者撮影



図4 田植えの時期のハパオ村周辺 2016年1月 筆者撮影

場で指導するよう義務づける教育省令⁷を、2011年に発布した。

III 聞き書き演劇による文化の教育資源化

1. 高校教師対象の「聞き書き演劇ワークショップ」の創作過程

(1) ファシリテーターと参加者のプロフィール

ワークショップのメインファシリテーターの花崎攝⁸は、2012年からCGNの招聘を受け、演劇ファシリテーターと

6 イフガオの地元NGO「SITMo」が中心に活動し、2006年からは日本ユネスコ協会連盟がNIKEプロジェクトを支援している(関口2012:85)。

7 フィリピン教育省の教育省令2011年「DepED62」で、フィリピン先住民族の知の体系と実践をスローガンに、授業でのカリキュラムづくりを義務化している。

8 花崎攝は、かつて日本の演劇集団「黒テント」に所属し、フィリピンの演劇集団「PETA (Philippine Educational Theater Association フィリピン教育演劇協会)」との交流経験を持つ。「PETA」は、社会的な題材をテーマとしたオリジナル作品を公演するとともに、地域にはいて、地域の問題を掘り起こし、それを演劇で表現する教育演劇に取り組んでいる。

して活動している。

今回のワークショップは、花崎攝の他に日本人ファシリテーター2名とCGNの教育演劇活動に関わってきたコーディリエラ出身のファシリテーター5名の計8名でなされた。どのファシリテーターにとっても聞き書きの手法は、初めての試みになる。

ワークショップの参加者は、イフガオ州教育省の紹介で、イフガオ州のラガウェ、バナウェ、フンドウアン、キアング、マヨヤオ、ティノック、ラムットの7地域から17名の高校教師とイフガオ文化遺産事務局から1名の計18名(男性5名、女性13名)であった。年齢の幅は22歳から49歳で、平均年齢は34歳になる。ほぼ半数の教師が演劇ワークショップの経験はなかった。農業経験については、ほぼ全員がなんらかの形で経験し農家出身者が多い。ある教師は、安定した収入が得られる専門職になるように親から求められ、教師になったと語る。多くの教師がそれを聞き、頷く様子をみると、農業から離れることが、教師になるための大きな動機になっていることが推察される。伝統的な農業の価値を授業で教える教師自身が、実は農業を悲観的に捉えながら教育を受けてきたことになる。

参加教師の多くはトゥワリ語を日常言語として使用するが、マヨヤオ出身者などはアヤンガン語を使用する。アヤンガン語を使用している人はトゥワリ語を理解できるが、トゥワリ語を使用している人の中には、アヤンガン語を理解できない人もいる。そのためワークショップでの進行には英語を用い、演劇の創作においては、トゥワリ語、アヤンガン語の他に、フィリピン公用語であるタガログ語、コーディリエラ地方で広く話されているイロカノ語、英語など多言語が用いられる(花崎2018:8)。

(2) ワークショップの創作過程

1日目は、自己紹介のための演劇ゲームで心とカラダをほぐし、ワークショップ全体の概要説明と、「聞き書き」とは何かの説明がある。声を出す、相手を感じる、表情を作る、集中するなど演劇の基礎である身体表現を学ぶ(図5)。3グループに分かれ(1グループ6名程度)、身近な出来事をテーマに絵画のように静止する演劇表現のタブローを用いて創作発表する(図6)。ハパオ村の文化、人、環境に詳しい地域出身のアドバイザーから、聞き書きに協力してもらう情報提供者6名のプロフィールが紹介され、各グループで希望する情報提供者2名を決め、何を聞くのか質問事項を事前準備する。

2日目は、3グループに分かれてハパオ村とその近郊のフィールドで「聞き書き」を行う(図7)。「聞き書き」の相手は、Aグループが、認定ツアーガイドを始めた農家の30代の男性と、温泉のあるバアン村の62歳の農婦となる。Bグループの相手は、伝統農法を継続し、組合を作って有機栽培の伝統米をブランド化して販売する女性と、政府機関の警備員を退職後、稲作を再開するが、農作業の手間を省くため、除草剤や化学肥料を使用する62歳の農夫となるCグループの相手は、伝統的な農耕儀礼、農事暦を先導する

ドゥムパグの夫妻と、ハパオ村の歴史に詳しい83歳の長老となる。各グループで「聞き書き」した内容を模造紙にまとめ、印象に残った言葉を共有する(図8)。ファシリテーターがモノローグの語り方を実演し指導する。各グループで聞き書きした相手のモノローグづくりが宿題となる。知っている田植えや収穫の歌や踊りをグループで共有する。

3日目は、若者の考えを聞くため、ワークショップの会場でもある国立イフガオ大学ハパオ校で農業を専攻する学生に対して、3グループに分かれて聞き書きを行い、インタビューシーンを再現する。宿題のモノローグを全員が朗読する(図9)。各グループで重要と思われる三つの出来事をタブローで表現する。

4日目は、楽器を使って歌と踊りを全体で共有する。各グループで絞り込んだモノローグを軸にしながら、モノローグで語られた内容の一部を演技で表現し、グループごとに物語を制作する。三つの物語をどうつなげるか検討し、ラストシーンを含めて構成する(図10)。全体を通して演劇の流れを確認する。ここで特徴的なことは、共通の台本はなく、身体で演技を繰り返しながら、全体で演劇の流れを定着させる。今回に限らず、台本を用いないのは、CGNの教育演劇の特徴でもある。演劇のタイトルは『PAYO』(田んぼ)に決定する。この日の練習は、自主的に夜の11時まで続いた。

5日目は、ハパオ村から州都ラガウェの教育省ホールに約2時間かけて移動する。アシスタント、ファシリテーターが中心となり、手に入る素材で舞台セットを準備する。参加教師は持参した民族衣装を身に着けて最終的なリハーサルを行う。本番ではイフガオ州教育省のトップをはじめ、約50名の教育省職員が、約1時間の演劇を鑑賞し大きな拍手を送った。出演者、観客それぞれの立場で感想と意見を交わした。

2. 聞き書き演劇『PAYO』の構成と内容

(1) 聞き書き演劇『PAYO』の構成

Aグループ、Bグループ、Cグループの順番で三つの物語が進行し、各グループの物語は聞き書きした相手のモノローグを中心に構成している。旅行者に棚田を案内するツアーガイドを三つの物語のつなぎ役として登場させることで、全体に統一した流れを生んでいる。三つの物語を最後に締めくくる場面では、ハパオ村の収穫儀礼綱引きブンノックをモチーフとして、「伝統」と「現代」の綱引きを舞台上で表現している。

(2) 聞き書き演劇『PAYO』の主な内容

台本はないため、公演の映像から書き起こした文章をもとに、主な内容を記述する。

第1幕

第1場面 ツアーガイドが登場。ツアーガイドで農家の青年のモノローグ「私は、ウィガン。農家の家で生まれた。イフガオ大学3年生の頃に結婚し、今では二人の娘と息子一人がいる。結婚し子供を持つと、生活はとても大変。赤



図5 身体の動きによる表現



図6 タブロー〈静止〉による表現



図7 ドウムバッグからの聞き書き



図8 聞き書きを模造紙にまとめる



図9 聞き書きをモノログで表現



図10 各場面の演技を構成

ん坊のための塩やオムツさえ買う余裕はないため、お金を稼ぐ道を探さねばならない。幸いにも役場が、旅行ガイドのセミナーを開いてくれて、ここフンドゥアン郡のガイド⁹として登録してもらった。ガイドをやるようになって2年になるな」

旅行者二人が登場。美しい広大な棚田に見とれる。ツアーガイドに案内を頼むことにする。

第2場面 バアン村の年配の農婦が登場。ツアーガイドは旅行者二人を連れて登場し、農婦に挨拶する(図11)。旅行者の求めで、農婦と旅行者の写真を撮る。ツアーガイドの家の田んぼに明日、親族がバタン¹⁰に来てくれるので、その準備のために旅行者とともに家路につく。

第3場面 農婦のモノログ「私はバアン、62歳。6人の子供がいるが、今の彼らは仕事があり、家族がいるため、

一緒に住んではいない。私の両親もバアン村の出身。私が子供の頃、両親が田んぼの世話をして家族の生計を立ててくれていたのを見て育ったのさ」

農婦の子供の頃の回想シーンになる。両親が田んぼの世話を家族とともにしていた頃、朝早く父親に起こされ、兄弟たちとシブシブ田んぼに出かける。

第4場面 農婦の子供の頃の回想シーンが続く。農婦の両親と兄弟4人で田植えの作業をする(図12)。子供たちは、競争して苗を植えようとするが、父親は正確に苗を植えることの大事さを諭す。一人の子供はあまりの暑さに音を上げ、農業をするより勉強することを心に誓う。

第5場面 回想シーンから現在に戻る。農婦の家族が田植えの作業をしている。親族の家の田んぼでバタンがあることを思い出す。作業を切り上げ手伝いに行くことにするが、

9 フンドゥアン郡は、2016年頃から地元住民を対象にエコツーリズムのガイド養成に取り組んでいる。

10 バタンとは、田植えや稲刈りなど人手が必要な時の相互扶助、助け合いをいう。

子供たちは嫌がる。父親は、手伝いに行くことの大事さを子供に諭し、連れて行く。

第6場面 ツアーガイド兼農家の青年は、親族がバタンにきてくれることを、やきもきしながら待っている。親族の家族が登場し、青年は礼を述べ、田んぼの石垣を固定する作業を依頼する。青年は、キウィット¹¹やゴールデンコホール¹²が田んぼに繁殖してしまい、石垣を補強せざるを得ない事情を説明する。ツアーガイドで農家の青年のモノローグ「ゴールデンコホールやキウィットの繁殖の影響で、棚田の石垣が崩れ、頻繁に石垣を補強する必要がでてきた（図13）。石垣の石を積み直すのは、非常に難しい作業。かつては若い世代が進んで無給で手伝ってくれたが、今の若者はバタンの価値を知らない」と語る。青年の知り合いが登場し若者に仕事を頼むならば日給を払う必要があることを青年に助言する。青年がツアーガイドと田んぼの二つの仕事の話を聞き、酒を飲ましてくれと頼むが、青年は軽くあしらい家路につく。

第2幕

第1場面 教育省の警備員を退職後、農家に戻った男性とその家族が登場。男性のモノローグ「あそこにおるのは、私の妻だ。買ってきた肥料を撒いている。隣は息子だ。除草剤を使っている。オッ 忘れておった。私はドウルヌアン、62歳で9人の子がいる。昔は木彫り職人だった。長くはなかった。木彫りを 続けていたら森の木はすべてなくなってしまわないかと心配になりやめた。間もなく教育省の警備員となり28年間勤めた。今は仕事を引退して、ご覧の通り、農家に戻ってきた」と語る（図14）。

男性の息子が田んぼにキウィットを見つける。妻がゴールデンコホールの卵を目にする。

孫が大きなネズミのガンドを見つけ驚く。男性のモノローグ「あの大きなネズミは、ガンドと言うんだ。わしが若い頃には、ガンドはいなかった。なぜおようになったか。村の環境は手入れされていて、ガンドが住めるような状態ではなかった。今は、人手不足で田んぼしか手入れできず、パゲの実がなるとガンドが取っていつてしまう。行政が援助してくれるならば、まずは石垣の保全だ。それができなければ、どうなる。この棚田は、私たちの生きる糧だ。今

のような状態のままで、どうしたらいいのだろう。苗を植えながら、お米を買って食べなければいけない、皮肉な現実があるんだ」と語る。家に食べる米がないのに気づき、店に米を買いに行くことにする。途中、伝統農法で在来種米を栽培し商品化している女性と出会う。男性は、女性から在来種米を買わないかと持ち掛けられるが、値段が高いことを理由に断り立ち去る。

第2場面 女性のモノローグ「こんにちは。私はアギナヤンで、ビジネスウーマンです。5人の子供がいます。一人はマニラ、二人はヌエバエチジャ、あと二人はフンドウアンにいます。不幸にも主人は亡くなりました。反政府軍に遭遇し命を落としました。女手一つで5人の子どもを育てました。子供たちは全員、学校を卒業し、独立しました。これからは、私自身が、社会の役に立てるには、どうしたらいいのか考え続けてきました。村の貧しい人にお金を渡していいのですが、できません。私がした事は、セミナーに参加し、そこで得た知識を村人に伝えることでした。そう、お伝えするのを忘れていました。私は、作物を販売することで農家の人たちを支援している組織に入り、とても仕事にやりがいを感じています」と語る。

女性は、農家の人からお米を受け取り、バイヤーに渡す。それで得たお金を農家の人たちに渡す。その後、肥料にするため鶏の糞を集めていると、若い女性に「何をしているの」と問いかけられ、有機農法について説明しようとするが、嘲り笑い立ち去って行く（図15）。「ご覧の通り、有機栽培をボランティアとして教えているのに、彼らは、私のことを狂っていると言って、ただ笑うだけなの。彼らは、商品としてある肥料がいいらしいの」と女性は嘆く。有機栽培に関心のある学生たちが家に来ていると告げられ、気を取り直し家に戻る。

第3場面 初対面の男女二人の大学生が道で出会い、お互いの身の上話を始める（図16）。男子学生は23歳で1年生。両親を助けるために4年間、農業、建設現場、ベビーシッターなどの仕事をしてきた。女子学生は26歳で3年生。自分の赤ちゃんの面倒をみるため5年間休学していた。二人は5年間での村の暮らしが大きく変化したことに気づく。村では農業機械を使い始め、自分で作った米は高く売り、安い流通米を買っている村人もいる。美しかった棚田が耕作放



図11 観光客をガイドする青年



図12 田植えをする農婦の家族



図13 石垣を補強するためのバタン

11 キウィットはウナギの仲間で、田の粘土層に穴を開け水漏れにして棚田を崩壊させる。

12 ゴールデンコホールは、大型の淡水生の巻貝で稲の苗など耕作物を食べてしまう。



図 14 農家に戻った男性と家族



図 15 有機栽培を嘲笑される女性



図 16 身の上を語り合う学生



図 17 伝統文化継承者の語り

棄で荒れ放題の景観になっていく。二人は村の変化の理由を、世の中の急速な変化によって、人々の心も変わり、より効率を求めるようになったからだと言口にする。

教師とツアーガイド、観光客が登場。教師が、二人の学生にツアーガイドと一緒に伝統文化継承者を捜して欲しいと依頼する。教師退場、生徒がツアーガイドと日本人観光客を案内しながら飲んでいたペットボトルを捨てる。「ほら、今どきのやつらときたら、こんなふうに自然を汚して、しつけがなくなっているんだ。僕はね、ツアーガイドだから、こうしてゴミを拾っているんだ。小さいことだけど、自然のためにできることはする」と旅行者に説明する。

第3幕

第1場面 ツアーガイドが、学生から聞いた伝統文化継承者の家に、観光客とともに訪問する。伝統文化継承者の長老が登場。ツアーガイドは、ドウムバッグ¹³について長老に尋ねる。

伝統文化継承者のモノローグ (図 17)「私はヴィクター・メロウ、83 歳。この年までに見てきたことをお話ししましょう。私たちの祖先が、私たちの文化をいかに敬意と尊敬の念をもってきたかを見てきました。長く生きてきたお陰で、残念なことに、私たちの文化がゆっくりと消滅しようとしているのも目にすることにもなるのです。ドウムバッグについてお尋ねでしたね。ドウムバッグは、神に選ばれ、農

事暦を司る義務を負うのです。ドウムバッグは、田植えから収穫までの間、最初に農作業を始める先導者です。ドウムバッグが農作業を始めるまで、他の村人はその作業を行うことはできません。今でもその伝統は残っています。この伝統を守らねばなりません。だから市長をはじめ行政は、村人に伝統を守るように法律で定めるべきだと思います。ドウムバッグについてもっと詳しく知りたければ、ハパオ村にいるドウムバッグを訪ねたらいい。あなたの質問に答えてくれるだろう。年を取るにつれ、記憶がおぼろげになってくるよ。さあ、ここからドウムバッグの家に行く道を教えてあげよう」と長老に促され、ツアーガイドは、観光客とともにドウムバッグの家に向かう。

第2場面 収穫作業をしているドウムバッグと村人たち(図 18)のもとに、ツアーガイドが訪れる。ツアーガイドがドウムバッグに話を聞かせて欲しいと依頼すると夫に説明をさせる(図 19)。ドウムバッグの夫のモノローグ「私はレイ・ビムヤック。ハパオ村のドウムバッグであるエレナ・ウヤミの娘と結婚しました。エレナがオーストラリアに行って不在の時、ドウムバッグの役割を引き受けなければならなかった。進め方については、エレナに国際電話をしながら確認しました。収穫や収穫後についてはよく知ってはいるのですが。収穫が始まる前夜、ドウムバッグ¹⁴が執り行われる。収穫の終わりは、ムンバキが執り行うフワによって正式に告げられる。翌朝、村人たちが川に集まり、プンノック(綱

13 ドウムバッグの重要な役割は、年間の村の農事暦を司ることにある。一番初めに田植えや収穫などの農作業や農耕儀礼をドウムバッグの所有する棚田や家で始める。

14 村人たちとの収穫作業を始める前日に、豚 1 頭を供犠し、腸は燻製にして取り置く。音楽に合わせてムンバキがドラの音に合わせて踊る。



図 18 稲を収穫する女性たち

図 19 ドウムパッグと夫の語り
※写真 9~19 2018 年 5 月 4 日撮影 CGN 提供

図 20 収穫儀礼フワを見守るドウムパッグの家族



図 21 伝統と現代の葛藤を綱引きで表現

図 22 ムンバギ(写真右)による収穫儀礼フワ
2014 年 8 月 15 日撮影筆者図 23 ハパオ川での綱引きブンノック
2014 年 8 月 16 日撮影筆者

引き)が行われるのさ」

酔っ払いが興奮して登場。ドウムパッグの収穫を待っている間に自分の棚田の稲穂が鳥にすべて食べられたと、ドウムパッグらに攻め寄る。ドウムパッグの夫がなだめながら退場する。

ドウムパッグのモノローグ 「ご覧になりましたよね? ドウムパッグとしては、こういうプレッシャーに常に付きまわっています。誰もが協力的ではないのです。今では、村人の中に伝統の風習に従わない人もいます。そういう人たちは、早くに収穫を始めてしまう。だってみなより先に田植えをしてしまったのですからね。もし、ネズミや鳥が稲穂をついばんでしまったら、村人たちの非難は私たちに来るのです。お金の問題もあります。私たちは儀礼に必要なものをすべて自己負担で用意しなければなりません。お供え

物である豚も含めて。過去に一度こんなことがありました。母に聞いたのです。ブタの代わりに鶏をつぶしてもいいかと。当時、私たち家族はお金に困っていて、ブタを買うお金がなかったのです。ブタの値段は 15000 ペソ¹⁵を下りません。でも、母の返事は、『ありえない。私の目の黒いうちは許しません。私が死んだあとには、好きなようにしてもいいいけど』と。そうはいつても、伝統への敬意の証として、わたしたちも伝統を受け継いでいかなければなりません。ドウムパッグであることは、本当にいろいろな悩み事を生むのです。でも、できる限りこの伝統を継承するために頑張っていくつもりです」と語り、収穫作業に戻る。収穫している村人たちは、収穫前に鳥に食べられた原因は、ドウムパッグが田植えをする前に田植えをしたことにあると口にする。村の伝統を守ること、お互いを信頼することの大事さを村

15 15,000 ペソは日本円にして約 3 万円で、フンドウアン地方公務員の平均年収は、10,000~30,000 ペソ程度になる。

人同士で確認する。村人たちは退場する。

第3場面 ドウムバッグの家族は、収穫儀礼フワをしているムンバキ¹⁶の様子を眺めている(図20)。儀礼の目的は村の豊作と翌日の綱引きブンノックの成功を占うことであり、鶏の胆のうを見てよき兆しがあれば明日のブンノックは開催できることを、ドウムバッグの夫が子供たちに説明する。子供たちは、民族衣装を着てブンノックに行けることを楽しみにしつつ退場する。ドウムバッグの夫がムンバキに近寄り、占いの結果を聞く。「とてもいい兆しだ。ワインを甕から出して、みなで飲もう。フワは無事終えた。明日はブンノックだ」とムンバキは語る。

第4場面 学生のモノログ「私は、ジェイド・ドウルナン、20歳です。イフガオ大学ハパオ校で農業を専攻しています。村で儀礼が行われる度に、長老の話をよく聞きました。時折ツアーガイドをやっていたので、自分たちの文化について学びました。特にドウムバッグについては、よく知っています。ドウムバッグは、村のリーダーであり、村で最も裕福な家族がなります。田植えから収穫まで、最初の作業をドウムバッグが始めるのです。特に収穫の時期は大切です。様々な儀礼を主宰します。文化や伝統への若者たちの関心は欠如していると感じています。私ですら、十分に村の伝統を理解しているとは思えません。あなたが私に、伝統を続けることを選ぶのか、忘れ去ることを選ぶのかを問うならば、容易に答えることができます。私たちは、すでに現代社会で生活しているし、世界も私たちも変化し続けている。但し伝統の背後にある価値をもっと理解できれば、私たち物の見方も変わってくるだろう」と語る。

全員が舞台上がり、伝統的衣装のチームと現代的衣装のチームに分かれ、キナーグ¹⁷を中央にして綱引きを始める(図21)。伝統チームと現代チームは、有機肥料と化学肥料、伝統米と商業米、伝統的宗教とキリスト教、非効率と効率、生き方とお金など、各場面で取り上げた伝統と現代の対立するキーワードを双方で叫びながら勢いよく綱を引き合い続ける。終演の音楽が奏でられ幕を閉じる。

IV 高校教師による聞き書き教育演劇の実践

1. 演劇ワークショップに参加した高校教師の反応

参加高校教師18人中8人、ほぼ半数が演劇ワークショップの経験はあると答えていた。中には、教育演劇集団PETAから指導を受けた経験のある教師もいた。

今回の聞き書き教育演劇について、経験者の教師に聞くと、「今まで教えている演劇は、すでにある民話や物語をベースにして、歌や踊りが中心になることが多く、聞き書き教育演劇は新鮮で、よく物事を理解する手法を示してくれた」、「退屈だったが、聞き書きの情報によって、より正確、より現実的な描写ができることは、いいことだと感じた」、「他

のグループの聞き書きした地域の課題も興味深かった。情報提供者の明確な説明に感謝している」、「現代の問題を考え共有できる有効な手段」、「演劇を通じて、若者に文化を守る意味を教育することが必要であると感じた」とのコメントがあった。聞き書き演劇は、身近な地域の出来事を丁寧に掘り下げ、演劇の作品として炙り出すことで、現実の問題を考察する手法として高く評価している。

演劇ワークショップ未経験者の教師からは、「興味深く、自分にとって挑戦の場だった」、「とても革新的で学校現場で取り入れるべき手法。知るべき、練習すべき」、「コミュニティにおける現代の問題を共有するのに効果的な方法」、「伝統的な演劇の指導方法と異なり、とても新鮮。感情を素直に出すのは難しかったが、次第にできた」、「教育演劇を通じてドウムバッグの役割を知れて満足」、「教育演劇は革新的なアプローチ。現場を訪れ、目で見て聞いて、実践的な学びだった」とあり、聞き書き教育演劇の有効性を感じ、すぐにでも実践したい意気込みを感じさせるコメントが経験者以上に多かった。

演劇ワークショップで難しさを感じたことを尋ねると、「モノログをまとめ、ひとつの物語にするのが難しかった」、「シーンの組み立て」など、聞き書きした内容をモノログにし、物語として構成する創作の難しさを多くの教師が挙げている。「参加者各人の意見が様々で、ストーリーも混乱。修正を加えながらまとめるのに苦労」、「最初は全員が協力的ではなかったので、グループを引っ張るのが難しかった」とあり、5~6名のグループ内で情報共有し意見調整しながら、まとめることの難しさを感じた教師が多い。「演劇の基礎的な知識不足と各パートの時間が不足していた」など、知識不足と時間不足で焦りと戸惑いを感じていた教師もいたが、「初めての演劇で、もがきながらも何とかやり切れた」と最終的には多くの教師が達成感を感じていた。

2. 教育現場での聞き書き教育演劇の実践

演劇ワークショップに参加した高校教師に対して、高校生たちによる演劇発表公演(2018年8月31日)に参加を希望する高校を募った結果、バンバン高校(フンドウアン)、バナウェ高校(バナウェ)、ハピッド高校(ラムット)、トゥラエド高校(マヨヤオ)、ティノック高校(ティノック)、キアングン高校(キアングン)、カバ高校(ラガウェ)、ラガウェ高校(ラガウェ)の7地域8校の参加校が決定した。参加校の高校教師を対象に、地元の伝統文化継承者により劇中の音楽演奏で使用するイフガオ民族の竹楽器作りのワークショップ(7月7日)と、日本とフィリピンのアーティストによる背景幕制作のワークショップ(7月14日~15日、21日~22日)が実施された。演劇指導については、日本とフィリピンの演劇ファシリテーターが高校8校を訪問

16 ドウムバッグの依頼で農耕儀礼を執行する。ムンバキのバキは呪文・祭文の意味で、ムンバキはシャーマンであり、占い師、邪術師、呪医でもある(合田1998:87)。

17 キナーグとは、綱引きで引き合う人形である。乾燥させた稲藁を束ねて、アエと呼ばれる蔦でしっかりと縛り制作する。人形の両腕は、両方のチームが引き合えるようにリング状となっている。

し、制作中の作品への助言と演劇ワークショップ（8月17日～21日）で発表公演に向けた最後の仕上げがなされた。高校教師と演劇ファシリテーターから指導を受けた高校生らは、自分たちの地域の農業をテーマに地元の伝統文化継承者、農業従事者を中心に聞き書きした言葉を軸に演劇を創作した。ラガウェのドンボスコ高校講堂での発表会（8月31日）では、聞き書きした相手の言葉を基調にし、各地域の景観をもとに製作した背景幕をバックに、各校とも表現力豊かでメッセージ力のある作品に仕上がっていると演劇ファシリテーターから高く評価を受けた（Guilingen 2018：50-51）。

イフガオの高校教師3名とCGNのファシリテーター3名が来日し、5月の演劇ワークショップで創作した『PAYO（田んぼ）』を長野県上田市の上田街中演劇祭で公演（10月12日、13日）した¹⁸。各公演とも満席となり多くの拍手を受け、参加したイフガオの高校教師は、自分たちイフガオの文化をありのまま伝えることの意義と誇りをあらためて感じたコメントしている。

V おわりに

本稿では、イフガオ州の高校教師を対象とした聞き書き演劇ワークショップの取り組みを、演劇による文化の教育資源化として捉え、身体を通じた伝統知識の継承が世界文化遺産である棚田の持続可能性に寄与する資源化となりうるのか、そのプロセスを考察してきた。

安定した収入が得られる教師になることを親から求められ、学校では「しっかり勉強しないと、家で農業をすることになるぞ」と先生から叱られた経験を、農家出身の多くの教師が語る。そのことは、従来の学校教育の内容が、都市部で必要とされる知識や技術であったことの証左でもあり、若者がイフガオから都市部へ流出する要因にもなっている（関口 2012：79-80）。

世界遺産コーディネリア棚田群の危機遺産登録を契機に、イフガオ州政府は、地元NGOなどと協力し、伝統文化継承者のリスト化、伝統文化継承者による授業、教科書づくりなど、文化の教育資源化を2003年から積極的に進めてきている。授業、教科書による言語知を中心とした伝統文化の教育資源化といえる。

またイフガオの各地域で実施したPETAやCGNによる教育演劇ワークショップは、民話やインタビューをもとに演劇制作者の解釈、表現に重点が置かれたフォーラムシアター形式であった。今回初めて試みた聞き書き教育演劇は、聞き書きした相手の言葉そのものに重点を置き、モノローグを中心に構成する。聞き書き教育演劇によって、農業経験もあり伝統農業に関する知識も豊富なイフガオの高校教師さえもが、新たな気づきを多く得たとコメントしている。

聞き書きした相手の言葉と表情をもとに、身体表現を通じて聞き書きした相手の心情、思いに迫るため、言語知以上の気づきを得ていると筆者は考える。聞き書き教育演劇

は、身体知を中心とした文化の教育資源化といえる。

ハパオ村の綱引きブンノックをはじめとする農耕儀礼も、身体知を通じて次世代に繋ぐための教育資源と捉えることができる。地域の紐帯と持続可能性を目的とした儀礼が身体技法を通じて身体知を継承してきたことと、聞き書き教育演劇で身体技法を用いた教育資源化に、身体知による伝統知の継承という共通性を見出すことができる。

何のために、誰のための資源化であるかの問いに当てはめると、次世代に伝統知を継承することのために、地域共同体のための資源化プロセスと言える。一方、目先の経済的利益を最優先した観光資源化は、伝統知を継承する地域共同体の基盤を崩壊し、観光資源でもある大棚田の衰退も免れない。世界文化遺産の大棚田群の価値は、農耕儀礼を基盤とする地域共同体の持続可能性に拠るところが大きいの。そのためには、農耕儀礼、棚田の石垣づくり、水路づくり、伝統農法などの伝統知を次世代に継承することを目的とした聞き書き教育演劇による文化の教育資源化の動向を今後とも注目したい。

参考文献

- Guilingen, Renato 2018 『演劇ワークショップでアジアの農村をつなぐ』、CGN。
- 内堀 基光（編）2007『資源と人間』：15-43、弘文堂。
- 合田 濤 1998 『イフガオ ルソン山地民の呪詛と変容』、弘文堂。
- 渋谷 寿一 2005『森の名人ものがたり』：314-323、アサヒビール。
- 清水 展 2007 山下晋司（編）『資源化する文化』：123-150、弘文堂。
- 2013『草の根グローバリゼーション』、京都大学学術出版会。
- 関口 広隆 2012『世界遺産を守る民の知識』明石書店
- 反町 眞理子 2018 『演劇ワークショップでアジアの農村をつなぐ』、CGN。
- 花崎 攝 2018 『演劇ワークショップでアジアの農村をつなぐ』、CGN。
- 日丸 美彦 2013 稲村 哲也（編）『共生の文化研究8』、愛知県立大学多文化共生研究所。
- 森山 工 2007 山下晋司（編）『資源化する文化』：61-91、弘文堂。
- 山下 晋司（編）2007『資源化する文化』：13-24、弘文堂。

18 上田街中演劇祭では、同時に上田市稲倉棚田で聞き書き演劇ワークショップも実施した（2018年9月16日、10月13日）。